只見ユネスコエコパーク関連事業
只見自然環境基礎調査報告

特別企画展

只見の湿原

――その生態と歴史

生物多様性のホットスポットであり
地史的なタイムカプセルである
只見ユネスコエコパークの湿原の全貌

特別企画展「只見の湿原」の開催にあたって

只見町は、日本海側の多雪地域に位置し、標高1000ｍ前後の山々が連なる山間地域にあり、冷涼な気候帯にある。只見町を含めた奥会津地域の標高が1500ｍを超えるような山岳部には、多雪環境を反映し雪田群落が形成され、その中には高層湿原が形成されている。こうした高層湿原は尾瀬地域を中心に会津駒ヶ岳、中門岳など奥会津地域の山々の山頂部に広く見られ、只見町でも浅草岳や丸山岳山頂部に、小規模な高層湿原が見られる。一方、只見町には、比較的低標高地にも湿原が分布している。その代表的な湿原が、梁取の大曾根湿原（梁取湿原）と布沢大田の大谷地である。こうした湿原には、その特異な環境を反映した植物群落（湿原植生）が形成され、希少な動植物の生育場所、生息場所となっており、地域の生物相の多様性に大きく貢献している。

そうしたことから、大曾根湿原については、町の天然記念物に指定され、保護・保全が図られている。大曾根湿原は、天然記念物指定に合わせて、1971年(昭和46年)に馬場義仲氏により湿原の調査が行われ、主に湿原の現況と植生が報告されている。また、1987年(昭和62年)に五十嵐徳三氏により保存のための調査が再び行われている。その他の只見町内に分布する湿原については、只見町史編さん事業の中で、刈屋寿氏らにより植生を中心に詳細な調査が実施され、概要が明らかにされている。その調査の成果は、『会津只見の自然―植物編』(2000）あるいは『会津只見の植物』(2004）などの出版物として刊行され、公表されている。しかし、こうした湿原は、周辺の開発行為や一部の心無い人たちの野生動植物の採取などにより、大きく傷つけられ、また、その価値が損なわれてきた。

そうした中、2014年、只見地域がユネスコのMAB計画の生物圏保存地域（国内呼称ユネスコエコパーク）の登録地に指定された。この登録により、域内の貴重な自然環境と生物多様性の保護・保全が義務づけられ、同時に、地域の財産としての湿原の重要性が認識されるに至った。これを契機として、只見町ブナセンターは、ユネスコエコパークの関連事業の一つ、自然環境基礎調査として、町内全域の湿原の植生調査を実施した。また、只見町教育委員会では、大曾根湿原と大谷地においてボーリング調査により、花粉分析と植物遺体の調査を行い、湿原の形成と過去の周辺植生の復元に取り組んだ。本企画展は、この二つの調査結果を中心に、只見町の湿原の実態を理解していただき、その保護・保全を図ることを目的としたものである。

只見町ブナセンター・只見町教育委員会

第1部　湿原植物と生物相

湿原とはなにか?

河川や湖沼およびその背後地、地形的な凹地の水はけが悪く雨水がたまりやすい地形には湿地（Wetland）が形成される。その過湿な立地環境に成立する草原植生が湿原（MoorあるいはBog）で、過湿な環境に適応した耐湿性の植物種群により構成される。

湿地は、その起源から湖沼が土砂や植物遺体によって埋設されて湿原となった湖成（陸化）型湿原と、扇状地や河川の氾濫原、平坦な谷や傾斜の緩やかな山地斜面など水はけの悪い凹地に植物遺体が堆積し湿原化した沼沢（しょうたく）化型湿原に大別される。奥会津地域で代表的な湖成（陸化）型湿原は、昭和村の矢ノ原湿原に見ることができ、その形成の歴史は８万年に及ぶ（写真①）。また、南会津町の駒止湿原は、沼沢化型湿原の代表例の一つである（写真②）。

写真①　湖成型湿原：矢ノ原湿原（昭和村）

写真②　沼沢化型湿原：駒止湿原（南会津町）

温暖な地域では、有機物の分解が早いため泥炭層が発達せず、沼沢地となり、そこにヨシが優占する群落が形成される。現在も、沼や湧水の周辺、水はけの悪い河川の後背湿地にその群落を見ることができる（写真③）。一方、高緯度、高標高の寒冷地では、有機物の分解が遅いため植物遺骸が半分解の状態で堆積し、泥炭が形成される。泥炭は年に1㎜程度の速度で堆積し、泥炭層となる。この泥炭層は、場合によっては数メートルにも及ぶ。この泥炭層の形成の主役となるものがミズゴケ類で、ミズゴケ湿地とも呼ばれる（写真④）。

写真③　後背湿地：ヨシ－ハンノキ群集（茨城県霞ヶ浦周辺）

写真④　ミズゴケ湿地：中門岳山頂部（檜枝岐村）

湿原の種類 ――低層湿原と高層湿原

泥炭地に発達した湿原は、その形状や構造、涵養水、養分条件などから低層湿原、中間湿原、高層湿原の三つに類型される。

1 低層湿原（Fen）

低層湿原は、地表面が凹地形ないし平坦で、地下水位面より低く、地下水や表流水に絶えず涵養される。泥炭層の発達は乏しいが、鉱物質に富む富栄養性の土砂、水分が周りから供給されるためヨシやスゲ類が繁茂し（写真下）、湿原の周辺にはハンノキやヤチダモなどの森林群落を形成する（写真上）。

化ケ物谷地（只見町入叶津）

2 高層湿原（Bog）

高層湿原は、泥炭の堆積が進み、地表面が地下水面より高く盛り上がり、降水により涵養される貧栄養性の湿原である。高層湿原では半分解の有機物から腐植酸ができるため、土壌は強い酸性を示す。過湿、貧栄養、強酸性という環境で生活できる植物はミズゴケ類のほか、ツルコケモモなどのツツジ科矮小低木などに限られるが、こうした特異な環境を利用して生きる希少な植物種群も少なくない。その代表がトキソウ、サワラン、サギソウなどのラン科植物である。

広沢田代（檜枝岐村）

高層湿原の外観は、お椀を被せたようなドーム状を呈しているが、その地表面には小凸地（ブルト）や小凹地（シュレンケ）、地塘（ちとう）*などの微地形が見られる（写真上）。これらは、ミズゴケ類の成長差や泥炭層堆積の場所的差異、凍結、融解などによる泥炭層の滑動など様々な要因によって形成される。ミズゴケ類は、こうして形成された微環境に応じて住み分けるため、高層湿原には様々な種類のミズゴケ群落が見られる。

＊湿原の中にできた水面部

3 中間湿原

中間湿原は、低層湿原から泥炭層が発達し高層湿原に移行する中途層として見られる湿原で、地表面の盛り上がりはない。湿原を涵養する水分の供給は、地下水と地表水であり、一部降水も加わる。中栄養性の湿原で、主要な植生はヌマガヤ群落である（写真右）。中間湿原には場所によって、高層湿原と低層湿原の部分が混在することが多く、両湿原に特徴的な植物種群が混在し、種の多様性も高い。

大曾根湿原（只見町梁取）

大曾根湿原のヌマガヤ群落

4 浮島湿原

湖沼が陸地化し湿原化する過程や、高層湿原が発達し地塘が形成される中で、湖沼の中に泥炭層からなる“浮島”が形成される場合がある。この浮島の形成については、三つのプロセスが見られる。一つは、湖沼周辺の低湿地に発達したヨシ群落あるいはヌマガヤ群落が湖沼の水位変動により洗掘され、根茎部・根茎層が湖岸から分離、浮遊する浮島である。高層湿原の場合は、地塘周辺にあるミズゴケ群落が浮島化するものである（写真）。もう一つの形成過程は、湖成（陸地化）型湿原に見られるもので、湖底堆積物が有機物分解過程で発生したガスにより浮上し、形成されたものである。三つ目は陸域に堆積した泥炭層が、地滑りなどにより水面に滑り出して、浮島化する場合である。只見町にも浮島湿原が存在するが、これは一つ目のプロセスにより形成されたものとみられる。

北海道滝上町の浮島湿原